

< 2014年 11月 >

古賀 順子

ルーブル美術館の「プシュケとエロス」

2013年の入館者数が900万を超えたルーブル美術館。その魅力は、35,000点の所蔵作品だけではなく、800年の歴史の中で変動してきたルーブル宮と重なります。

1190年フィリップ2世(通称フィリップ・オーギュスト、聖ルイ王の祖父)が、パリを守るための城壁、お堀、見張り塔を備えた城を築きます。現在のルーブル美術館正方形中庭の4分の1の広さです。イギリスとの百年戦争(1337-1453)が一時中断し、パリが拡大する14世紀後半、シャルル5世がパリの城壁を西に移し、ルーブル宮を改築し、フランス王家の住いとなります。16世紀に入ると、フランソワ1世がルーブル宮をさらに拡張し、続くアンリ2世、アンリ4世、ルイ13世、ルイ14世など歴代の王たちが、絵画、彫刻、宝石、美術品でルーブル宮を飾ります。「モナリザ」はフランソワ1世、「カナの結婚」はナポレオン1世所蔵でした。ルーブル宮が美術館の役割を持つのは、17世紀以降です。ルイ14世が成人に達するまで執政したアンヌ・ドートリッシュ(ルイ13世の妃でルイ14世の母)が、1648年王立絵画・彫刻アカデミーを設立します。成人したルイ14世は、ルーブル宮の建設・改築を途中で放棄し、1678年ヴェルサイユ宮殿に移ります。王がいなくなったルーブル宮は、王家のコレクションを所蔵する場、アカデミー会員の発表の場になります。何世紀にも渡り続いてきたフランス王家のコレクションですから、どの作品も素晴らしく、それぞれに歴史があり、一つ一つを丁寧にみることで、フランスの歴史が分かります。1回で見れる作品数には限りがあり、総計16kmに及ぶ館内を歩き回ることも無理です。私は、毎回一つのテーマを決めて見学することにしています。

ドノン館1階に、アントニオ・カノヴァ(1757-1822)の「エロスの接吻で蘇るプシュケ」(1793)があります。1801年ナポレオン1世が購入した彫刻です。真白いカラーラの大石(カラーラはイタリア・ジェノヴァ近く)のプシュケとエロスは、官

能的で優雅で繊細、プシュケがエロスの接吻で目覚める瞬間を捉えた新古典主義の傑作です。ルーブル美術館には、ギリシア・ヘレニズム期の「サモトラケのニケ」「ミロのヴィーナス」があり、ギリシア文明がヨーロッパ文化の源であること、完璧で美しい人間の身体を借りた神々の彫刻の歴史は、2000年以上続いていることを教えてくれます。

プシュケは、三人姉妹の末娘で、美の女神ヴィーナスが嫉妬するほどの美しさでした。にもかかわらず、結婚相手が見つからないことを苦にした王は、デルフト神殿にお伺いを立てます。神殿のお告げは、プシュケを獣の住む山に置き去りにすること。王は泣く泣く神の言葉に従います。すると、西風の神ゼフィロスが現れ、プシュケを神の国に連れていきます。プシュケの美しさに嫉妬するヴィーナスは、息子エロスに愛の弓矢を使って、世界一醜いものにプシュケが恋をするように命じます。そのエロスは自らの弓矢に触れ、プシュケに恋します。ゼフィロスに連れて来られたプシュケは、毎夜姿の見えないエロスの訪問を受け、見えないエロスに恋します。ただし、決してエロスの姿を見てはいけないという禁止に反し、夜明けにエロスの姿を見たプシュケは追放されます。許しを乞うプシュケに、ヴィーナスは様々な試練を与えます。その一つが、地獄から壺を持ち帰ること。ただし、途中でその壺を開けてはいけないと禁じられます。好奇心に負けたプシュケは、壺を開け、壺から出た煙で眠りに落ち、エロスの接吻によって眠りから覚める瞬間をカノヴァは彫刻で捉えています。

プシュケとエロスの物語は、新古典派の芸術家を魅了します。ギリシア語でプシュケは、「蝶」と「魂」を意味し、プシュケは蝶と一緒に描かれ、人の魂を体現します。人の魂と神の愛が結ばれることを意味するプシュケとエロスは、幼児や思春期の男女など様々な姿を借りて、芸術家の感性で具現化されます。カノヴァの彫刻から5年後に描かれたフランソワ・ジェラルドの「プシュケとエロス」は、彫刻と絵画の違いはあっても、透明で冷たい官能的な感覚は同じだと言えます。